

「稻むらの火」成立過程の3つの物語

How the story of *Inamuranohi* was developed?

小泉八雲がねらったこと

The message of Lafcadio Hearn

大辻 永

Hisashi OTSUJI

東洋大学

Faculty of Science and Engineering, Toyo University

e-mail: otsuji@toyo.jp

概要：1937～1947年に使用された国語の津波教材「稻むらの火」に2つの地震（安政南海地震、明治三陸地震）が係わっていること、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）によるA Living God（生神）が原作であることは周知のことである。しかし、そのモデルである濱口梧陵翁が体験した激震の状況、A Living God、そして「稻むらの火」の3つの物語を詳細に比較検討した研究は見当たらない。原作のキリスト教的な色彩、津波に関して与えた可能性のある誤概念などを再検討した。

キーワード：小泉八雲、稻むらの火、A Living God、生神、Lafcadio Hearn、濱口梧陵

1. はじめに

地域連携事業（大辻，2023）をきっかけとして、以前手がけた仕事に盲点を見いだした。地震津波教材として有名な「稻むらの火」には、濱口梧陵というモデルがいて、その成立過程には性質の異なる2つの地震が関与し、A Living Godという小泉八雲による英文の原作がある。大地震が起こる度にこの教材の価値は見直され、地元、和歌山県の旧広村には「稻むらの火の館」が2007年に開館している。濱口の偉業は多様であり、その手記を基に、濱口が小さな経済をまわして村を復興したこと、堤防造りを途中で切り上げた謎、濱口の置かれた状況や生き立ちといった切り口から、以前、濱口に迫った（大辻, 2008）。

今回、小泉八雲の原作との対訳をまとめる作業を通して、①濱口が実際に被災した状況、②小泉八雲の原作 A Living God、③教材「稻むらの火」の三者の違い、特に小泉八雲の原作について詳細に検討されていないことに気づいたので、人文学的な比較検討を行った（表1）。

2. 小泉の原作と「稻むらの火」の位置

A Living God は『大西洋評論』に発表されたのち（田部, 1926），“Gleanings in Buddha-Fields”(1897)という11章からなる書籍の第1章として掲載された。小泉が言わんとしたメッセージを捉えるには、いちどは、本書一冊をまるごと検討しておく必要がある。New York Times 誌に発表当時掲載された書評を引用した紹介文がある。

Gleanings in Buddha-Fields is a volume of philosophical essays and sketches inspired by the teachings of Buddha. Through a series of loosely connected essays, the author offers readers a wealth of insights into Japanese life, art and religion. When the book was first published in 1897, it attracted the attention of the New York Times: ...it is only Mr. Hearn who has made us understand something of the Japanese way of looking at life and things, something of that religion which is the very soul and substance of Japanese existence, thought, and action. Today's readers are sure to recognize the elegance and depth of thought which have made the work a classic. (Routledge, 2005)

Gleanings は我々にはミレーの「落ち穂拾い Des glaneuses」を想起させ、聖書の中での意味合いまで遡る余地があるが、ここでは「点描」といった意味あいで受け止めて良さそうである。小泉は日本文化を様々な角度から描写する中で、その一事例として濱口を取り上げた。巨大地震の様態を報告することを主たる目的にした作品でもなければ、ましてやその後大戦中に強調された自己犠牲の精神を中心に謳つたようなものでもない。

この第1章 A Living God は、実質4つのパートから成っている。「稻むらの火」はその第3パートのみを訳したものである。訳書の多くは、第3パートのみの訳出をもって A Living God すべてであるかのようにしているので注意を要する。削除された部分を含めて読み解く必要がある。

第1パートでは生前に神格化された例として濱口を取り上げている。またよく考えると、なぜ村中

の人々が火を見て集まつてくるのか、その原理を説明しておく必要がある（大辻，2008）。小泉八雲はその点を第2パートで周到に記述している（小泉，1990）。

3. 具体的なポイント

(1) キリスト教的な色彩

「稻むらの火」では削除された、10歳くらいの孫、忠（ただ）が A Living God には登場しており、おじいさんの頭がおかしくなったと泣きながら訴える。ところが津波だと分かると、Little Tada ran to him, and caught his hand, and asked forgiveness for having said naughty things. となる。また、「稻むらの火」の最後の場面で、村人たちは庄屋の老人、五兵衛の前にひざまづいてしまう。助かったという安堵に加えて、脱力感や、この先の絶望感な不安感が読み取れる。ここが小泉の原文では、the headmen prostrated themselves in the dust before Hamaguchi Gohei, and the people after them. と表現され、邦訳では「ひざまづく」のほか「土下座をする」や「地面に手をついて頭を垂れる」と訳されている。原作では、村人を救うという奇蹟を起こした Living God 五兵衛を頂点とする、ある種キリスト教的な構図として描かれている。孫の忠を登場させたのも、このためであったと推測できる。複雑な幼少期を過ごしたハーンはキリスト教嫌いとされているが、原作では宗教色がじみ出ており、教材の「稻むらの火」ではそれがぬき去られている。

(2) 蓋葺きか茅葺きか

藁には稻わらと麦わらがあるが、屋根を葺くときは茅を使う。村長、庄屋の大きな屋敷 thatched farmhouse であれば茅葺きとすべきだろう。

(3) 前兆

A Living God で熱気を地震の前兆とする点は、科学的には受け入れがたい。

(4) 大規模な引潮と鐘

村人が引潮に気づいたかどうかは、「稻むらの火」では気づかないが、A Living God では気づいている。高台に呼び寄せることがさらに困難になるが、お寺の大鐘（「稻むらの火」では早鐘）が鳴り、火とあわせて「二重の警告」として機能するとしている。

(5) 原作と教材の共通点

「蟻のようなあゆみ」、「後へとうのいた」、「うっちやつ

ておけ（Let it be!）」など、「稻むらの火」に直接引き継がれている原作の表現も枚挙にいとまがない。

4. おわりに

原作の小泉八雲の思い入れを踏まえ、教材成立の経緯を把握することによって、この過去の国語教材は生きた理科教材になる。そのカギは我々理科教員が握っている。

文献

Hearn, Patrick Lafcadio (1897) : A Living God, in *Gleanings in Buddha-Fields - Studies of Hand and Soul in the Far East* ; Boston and New York: Houghton Mifflin Co.

大辻永 (2008) : 「稻むらの火」のモデル濱口梧陵～人間愛と機転に満ちたハードとソフトの適応策、三村信男・伊藤哲司他(編著)『サステイナビリティ学をつくる』新曜社, 173-182.

大辻永 (2023) : 人間と自然～理科の視点から国語教材を考える～（文京アカデミー 3回講座），②6/28: 稲むらの火。

Routledge (2005) : Gleanings in Buddha Fields <https://www.routledge.com/Gleanings-In-Buddha-Fields/Hearn/p/book/9781138975200> (2027.7.27 アクセス)

田部隆司 (1926) : あとがき『小泉八雲全集 5』, p.547.

小泉八雲著・平川祐弘編 (1990) : 生き神様『日本の心』, 講談社学術文庫, 209-233.

表1 「稻むらの火」への3つの物語

	濱口儀兵衛の実話	A Living God	稻むらの火
地震の揺れ	安政南海地震（激震）M8.4 1854.12.24 明治三陸地震 M8.5 1896.6.15	百年前 1896.6.17 長くゆったり	長くゆったり
主人公	ヤマサ醤油七代目 濱口儀兵衛 34歳 腰まで津波に浸かる	濱口五兵衛 老人 村長 被害なし	庄屋 老人 五兵衛 被害なし
他の登場人物		孫・忠（10歳）	
場所	広神社（標高約10m）	高台	高台
村人の数	1200人 400軒	400	400
松明、着火	使用人に着火させた	孫が準備し五兵衛が着火	五兵衛が準備し着火
季節・時刻、風		秋、蒸し暑い。前兆	秋
山寺		大鐘 二重の警告	早鐘
村人 引き潮 ひざまづく		気づく 土下座（ほか）	気づかない ひざまづく